

# 読点の在処

紫 李鳥

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

“ここではきものをぬいでください”

さて、あなたはこの文章をどう解釈しますか？

今回の事件は、これに因んでいた。

目次

4話  
3話  
2話  
1話

10  
7  
4  
1

# 1話

「ここではきものをぬいでください」

さて、あなたはこの文章をどう解釈しますか？

① ここで、履き物を脱いでください。

② ここでは、着物を脱いでください。

どちらの意味にも取れます。読点が無いと、文章を読みづらくするだけではなく、意味までも違えてしまいます。

——今回の事件は、これに因んでいた。

最近、帰宅時間が遅くなったという夫に不信感を抱き、浮気調査を依頼してきたのは、田野晴明（29）の妻、延子だった。

28歳だという延子は、苦悩の日々を重ねていたせいか、所帯やつれが窺え、実年齢より5つ、6つ上に見えた。

「——いつ頃から帰りが遅くなりました？」

延子を相談室に入れた、「どんとこい探偵社」の社長、寺島が訊いた。  
「……ひと月ほど前になります。……それまでは定時に帰ってきて、夕食も一緒に摂っていたのに……」

延子は暗い顔で俯いた。

「結婚して何年になりますか」

寺島はペンを持った手を止めた。

「……まだ、1年足らずです」

「うむ……何か思い当たることはありませんか。……前兆とか」

「いいえ。……分かりません。突然です」

向けたその目は、翠色の深淵を想わせた。——

【どんとこい探偵社】きつての敏腕探偵、辰巳に田野の尾行を頼んだ。

### 《辰巳の報告書》

「9月×日 1日目 退社後、目黒で乗り換えると、不動前で下車。戸越銀座方面に向かう途中の三階建てのマンションへ並木ハイツツに入る。〈村井〉と表札のある101号室。約、一時間後の19:20に出ってくる。田野、帰宅。」

「9月○日 2日目 10:00、セールスマンを装って、村井の呼び鈴を押す。

「……だーれ？」

女の子の声。

「お母さんは居る？」

「いない」

「いつ帰ってくるの？」

「……わかんない」

「お父さんは？」

「いない」

「いつ帰ってくるの？」

「わかんない」

埴が明かない。声からして、3、4歳。101号室のドアが見える場所に隠れて、母親の帰りを待つ。10分後、レジ袋を提げた20代半ばの女が鍵を開けて部屋に入る。

当日、田野の退社時間を見計らって、会社の前で見張る。田野、真つ直ぐ帰宅。」

——その翌日の午後7時過ぎ。

「ははおやこころしたのがにげた！」

それが、辰巳からの最後の電話だった。

寺島が、辰巳のケータイに何度電話しても出なかった。

その後、辰巳からの連絡は無かった。自宅にも電話したが、帰宅し

ていないとの妻の返事だった。  
つまり、行方不明になったのだ。

——翌日の朝、へ並木ハイツの101号室から、幼女の絞殺死体が、  
新聞配達員に発見された。

#### 《配達員の証言》

「——ドアの郵便受けに新聞を入れようとしたら、子どもの赤い靴が  
挟まって、ドアが少し開いてたんです。変だなと思って覗いたら、  
布団も掛けないで女の子が仰向けで寝てたんです。なんか不自然だ  
など思っつてよく見たら、薄目を開けてこつちを見てたんで、ギョツと  
しました。一度も瞬きをしないんで、死んでると思っつて——」

#### 《テレビの音声》

「——死んでいたのは、このマンションの一階に住む、村井亜子ちゃん  
4歳で、死因は窒息死。行方が分からない母親が事件に関わっている  
と見て、捜査をしています」

テレビのニュースで事件を知った寺島は、聞き覚えのある住所と名  
前だったため、辰巳の報告書を確認した。間違いなく、辰巳が尾行し  
ていた田野が立ち寄った品川区のマンションの住人、へ村井だった。

辰巳と連絡が取れないのは、この事件に関係があるのではないかと  
考え、寺島は不安を募らせた。

その後、何度も辰巳のケータイに電話をしたが出なかった。自宅に  
も電話を試みたが、やはり帰宅していないという、妻の返事だった。

## 2話

寺島雅哉（42）を筆頭に、辰巳昇（37）と、事務員兼捜査員の杉本美優紀（23）。この3名で営っている小さな探偵社「どんとこい探偵社」は、主力の辰巳を失って、大きな打撃を受けていた。

急遽、求人募ることにした。

5人の応募者の中から採ったのは、探偵経験があるという、市川由子（32）だった。

長い髪を後ろに結って、眼鏡を掛けた由子は、いわゆるオバサン系の地味な風貌でパツとしなかった。

が、却ってこういうタイプが探偵に向いていた。

「——探偵経験ありということですが、どのような類いのものを？」

「主に浮気調査です」

冷静沈着に寺島の目を真っ直ぐ見た。

「じゃ、尾行のほうも？」

期待を込めた。

「はい。何度となく」

由子のその即答は自信に満ち溢れていた。——

「ははおやこころしたのがにげた」

寺島は、辰巳が最後に寄越した電話の内容が未だに把握できずにいた。

① 母親、子殺したのが逃げた。

② 母親、子殺し田野が逃げた。

さて、どっちなのだろう……。

この電話が、村井喬子を見張っていた時のものなら、状況的にはどちらも当てはまる。

①は、母親と子。つまり、喬子と子どもを殺した誰かが逃げた。となる。

②だと、親子と田野。つまり、喬子と子どもを殺した田野が逃げた。

となる。

由子が田野の張り込みから帰ってきた。

「お疲れさまで〜す」

美優紀が天然の明るさで出迎え、小型冷蔵庫から缶コーヒーを出した。

「あ、ただいま」

ハンカチで額の汗を押さえた由子が横顔を向けた。

「どうだった？」

煙草をくゆらしながら寺島が訊いた。

「ええ、今日も真っ直ぐ帰宅しました」

年季が入ったシヨルダーバッグからメモ用紙を出した。

「はい、どうぞ」

美優紀が、缶コーヒーを注いだグラスを置いた。

「あ、どうもありがとう」

報告書に写しながら、笑顔の美優紀をチラツと覗いた。

「うむ……子どもを殺しといて、平然と日常生活を送れるものかな……」

寺島が独り言のように呟いた。

「は??」

由子が慌てて顔を上げた。

「ん? いや、辰巳が最後の電話で言ったことを書き留めてみたんだが、どうもハッキリしない。親子を誰か別の人間が殺したのか、田野が殺したのか。だが、殺されていたのは子どもだけだから、親子を殺した、にすると辻褄が合わない。仮に田野が殺したなら、何食わぬ顔で普通に過ごせるものかなと思つてさ」

「ええ。……でも、特に変わった様子は」

「うむ……じゃ、やっぱり母親が殺したのかな……」

「社長、お先に」

美優紀がカバンを肩に掛けた。



「あ、お疲れさん」

「お疲れさま。気を付けてね」

由子も声を掛けた。

「ハイ、お疲れさまでしたあ」

笑顔でドアを閉めた。

「社長、その書き留めたのを見せてください」

「ん？あああ」

ソファーに深く座っていた寺島は、重そうに腰を上げると、自分のデスクの引き出しを開けた。――

「ははおやこころしたのがにげた」

それを読んだ由子が、もう一つの解釈を述べた。

③ 母、おやつ、子殺し、田野が逃げた。

「つまり、母親が子どもを殺した。そして、それを目撃した田野が逃げた」

「うむ……なるほど、そういう捉え方もできるな。さすが、ベテラン探偵だ。……だが、そうになると、田野は殺人現場を見たわけだから、いずれにせよ、動揺なりがあつて然るべきだろう？」

鼻炎の寺島は、鼻の穴の片方から煙を出すと、納得いかない顔で煙草を消した。

「ですよ。……でも、挙動不審の類いは窺えません。平静です」

「うむ……」

寺島は腕を組んだ。

だが、この時、由子は全く違う人間に焦点を置いていた。

辰巳の履歴書で知った、趣味の《絵画鑑賞（特に印象派）》に由子は着目した。

### 3話

翌日、田野の張り込みを口実にして、今日から開催される、『ゴッホとゴーギャン展』の会場に向かった。

ゴッホやゴーギャンは印象派の画家だ。印象派が好きなら、必ず現れると確信していた。

履歴書で見たその顔は、午前中には現れなかった。

10月とは言え、少し歩いただけでもまだまだ汗ばむ。夏帽は被っているものの、紫外線や白いシャツの汗じみを、由子は気にしていた。

正午過ぎ、駅から美術館に続く道なりのベンチで見張りながら、来る前に買ったパンを食べた。

土曜日とあって、公園には人込みがあつたが、家族連れやアベック、子どもが多く、一人で来るであろう辰巳を見付けるのはさほど難しくなかった。

——子どもを殺したのは、辰巳か喬子だ。つまり、二人は顔見知りだった。そして、その犯人を田野にするために、まるで自分が事件に巻き込まれたように装った電話をして、行方をくらました。

それが、由子の推測だった。

温くなったペットボトルのコーヒーを飲み終えても、辰巳らしき男は現れなかった。

半分諦めた瞬間だった。

……ん？

駅方面からやって来たその男の雰囲気には、犯罪者特有の暗影があつた。野球帽を目深に被り、俯き加減の男は足早に美術館に向かつていた。

辰巳だ！

由子は直感すると、ベージュのダウンジャケットと黒いスニーカーを目標にその男の後に付いた。

顔は定かではなかったが、ベテラン探偵としての根拠を基にした直感が、由子の嗅覚をムズムズさせていた。

男は目的地を目掛けて、一定のリズムを踏みながら真っ直ぐに進んでいた。――

案の定、男は美術館に入って行った。

――由子は公園のベンチで読書を装うと、帽子の鏢の先にある美術館の入り口に目を据えた。

やがて、黒い野球帽にベージュのダウンジャケットの男が出てきた。  
た。

いよいよ、本格的な尾行を始める。

由子は自分の直感を信じて、慎重に男を追った。

山手線に乗った男は高田馬場で降りると、目白方面に向かっていた。次の信号を渡った路地を曲がると、4階建てのビジネスホテルに入った。

……喬子はこのホテルに居るのだろうか。どうせ偽名を使っているだろうが、念のため電話を試してみた。

ホテルの看板にある電話番号にかけると、やはり、辰巳でも村井でも記載が無いという返答だった。ホテルからはこれ以上何の情報も得られないとなると、他にどんな手がある？外に出てくるであろう夕食時まで張り込むのは、時間の無駄だ。それに、喬子が既に弁当を買っていて、外出しないで部屋で食べる可能性もある。

……何かいい方法は無いものか。由子はあれこれと考え、そして悶いた。

アッ！そうだ！

由子はチェックインすると、エレベーターに乗って、渡されたキーの部屋番号の405の4階で降りた。

次に、辰巳のケータイ番号を押すと、401号室から順に進んだ。マナーモードにしていれば、この手法は無意味だ。

↓402↓403↓404↓405

どの客室からも着信音はしなかった。次に階段で3階に下りた。——同じく着信音は聞こえなかった。マナーモードにしているのか、と半分諦めながら2階に下りた。

201↓202↓203↓204

プルルル…

ん？着信音が鳴っている。電話を切った。着信音が止まった。リダイヤルした。

プルルル…

また鳴った。間違いない、この部屋に辰巳が居る。ドアに耳を当ててみた。

「何よ、さつきから」

女の声だ。喬子か？

「間違い電話だろ？知らない番号だから」

辰巳か？

「マナーモードにしときなさいよ」

「駄目だよ。今更ケータイは弄れないよ。事件に巻き込まれたことになってるんだから」

やっぱりだ！辰巳に間違いない。

## 4話

由子は急用を理由にしてホテルをチェックアウトすると、近くの公衆電話から、口にハンカチを当てて通報した。

「不動前のへ並木ハイツで死んでいた村井亜子ちゃんの母親が、高田馬場のへホリデー」というビジネスホテルの204号室に居ます。急いでください！ホテルを出るかも知れません」

ガチャン！

由子はメモ帳に書き留めた喬子のマンション名と、子どもの名前を確認しながら早口で喋ると、電話を切った。

辰巳の顔を確認するためにも、警官が来るのを待つ必要があった。由子は、ホテルの入り口が見える物陰に隠れた。

やがて、パトカーがホテルの前に到着した。警官がホテルに入ると、間も無くして、黒い野球帽にベージュのダウンジャケットの男と、黒いジャケットを着た茶髪の若い女が出てきた。

男の顔を確認すると、間違いなく、履歴書の写真で見た辰巳だった。由子は、自分の直感力に惚れ惚れした。

パトカーに乗る二人を見届けると、その足で、寺島への報告書作りのために、田野の会社前に向かった。

田野はいつも通り、定時のご帰還だった。

辰巳と喬子の繋がりは一体何だったのだろうか……。単なる浮気相手か？由子は釈然としなかった。

「あの日、買い物から帰ってきた女を見て驚きました。まさか、依頼者の夫の浮気相手が喬子だったなんて……」

喬子とはキャバクラで知り合って付き合うようになりました。ところが、子どもができて。産みたいと言う喬子に墮せおろと言ったら、突然、姿を消して。それっきり連絡が取れませんでした。張り込みをし

ていたあの日の翌日、喬子を訪ねました」

『どなた？』

『……俺』

『……！』

カチャツ！（ドアの鍵を開ける音）

『久し振り……』

『……昇さん』

「直ぐにドアを開けた喬子は俺を見て目を丸くしていました。俺の腕を引っ張って中に入れると、抱き付いてきました。喬子に愛情が無かったわけじゃありません。墮せと言ったのも、単に家庭があつたからです。俺によく似た我が子を目の当たりにして、可愛さもありません。しかし、妻と別れる気はありませんでした。そのことを告げて部屋を出しました」

辰巳は後悔するように俯いた。

「彼の子どもが欲しかった。墮せと言われた時、一人で育てようと思いました。私が勝手に産むのですから、辰巳さんに生活費の請求をすることはできません。親からの仕送りと貯金、母子手当で子どもを育てました。

そして、あの日。偶然に再会した辰巳さんともう一度、よりを戻したいと思いました。しかし、離婚の意思が無いことを聞かされ、この先、子どもを抱えての人生に、急に虚しさを感じてしまいました。思い悩んでいるうちに、生きる意味を無くした私は、発作的に子どもを絞めていました。……気が付くと死んでいました。

我に返った私は、事の重大さに狼狽え、一緒に死のうと思ひ、医者から貰った睡眠薬を飲もうとしました。

ところが、気になって引き返してきた辰巳さんに止められました。死んでいる子どもに驚いている辰巳さんに経緯を話しました。

その時、チャイムが鳴って、ドアスコープから覗くと、田野さんで

した。田野さんとはひと月ほど前に、学習教材の訪問販売で来た時に知り合い、子どものことで色々と相談に乗ってもらっていました。出ないでいると、田野さんは帰りました。――」

「――その時です。子ども殺しの犯人を田野にしようと思った俺は、『はあ、おやつ、子殺し、田野が逃げた』  
と、犯行現場の目撃者を装った電話を社長にすると、喬子と行方をくらましたんです。――」

由子が帰社すると、いつも能天気的美優紀が泣いていた。

「あ、お帰り」

「ただいま」

「ズルズル……お帰りのさい」

鼻水を吸りながら美優紀が顔を上げた。

「……どうしたんですか?」

寺島に尋ねた。

「辰巳が殺人ほつじよ幫助で逮捕された」

「えー?」

由子は目を丸くすると、驚いた振りをした。

「それも、よりによって田野の浮気相手だ。辰巳とその女は昔、付き合ってたらしい」

片方の鼻の穴から煙草の煙を出しながら、寺島が深刻な顔をした。

「そんな偶然があるんですね」

由子はカップに入れたインスタントコーヒーにポットの湯を注いだ。

「……辰巳さんにそんな人が居たなんて……グジュ」

美優紀はそう呟きながら、鼻をかんだ。

「ほの字だったんだよ」

カップをテーブルに置いた由子に、寺島が小声で言った。

「へえー、そうだったんですか……」

随分、オヤジ好みだな、と由子は思った。

《「調査結果」》

ご主人に女性の影はありませんでした。担当が営業に異動して、帰宅が遅くなっただけです。心配ありません。ご主人とお幸せに》

寺島は、虚偽の報告書を田野の妻、延子に送った。敢えて波風を立てる必要は無い。それには、寺島の私情が介在していた。延子の哀しげな目が忘れられなかった。

そんなある休日だった。野暮用で新宿に行った帰り、靖国通りで寺島が信号待ちをしていると、

「社長……」

気安く声を掛ける女が居た。その声に振り向いたものの、目の前で笑っているソフトウエーブの美人が誰なのか分からなかった。

「イヤだ、分からないんですか?」

その喋り方で分かった寺島は、丸くした目を笑わせると、

「えっ!……市川……さん?」

と、半信半疑の決断を下した。

「ハイ。当たり前」

由子は含み笑いをした。

「クエツ!驚き、桃の木だ」

新鮮な刺激を受けて、血の循環を良くした寺島から軽口が飛び出た。

「変われば変わるもんだな。同一人物とは思えないよ」

「この美貌で何度、探偵の面接で合否の否になったことか。『この仕事は目立つっちゃまずいのよ』なんて言われて。だから、だて眼鏡で地味にしてるってわけ」

「ね、その辺でお茶しない?」

寺島は、馴れ馴れしく由子の肩に腕を回した。

「ええ。いいですよ」



由子という、有望な人材を得た、【どんとこい探偵社】は、どうやら安泰のようだ。

終